一　貧者と窮者の対話。貧窮に関する問答ともいう。

892　風に混って雨の降る夜、その雨に混って雪の降る夜は、寒くて寒くて仕方がないので、堅塩をかじったり糟汁をすすったりして、しきりに咳きこみ鼻をぐすぐす鳴らし、ろくすっぽありもしないひげをかき撫でては、おれほどの人物は他にあるまいと力み返ってみるけれど、それでも寒くてやりきれないので、麻ぶとんをひっかぶり、布の袖無をありったけ着重ねるのだが、それでもやっぱり寒い夜であるのに、自分よりもっと貧しい人の父や母は、さぞかしひもじく寒がっていることであろう。妻や子は、きっと物をせがんで泣いていることであろう。こんな時にはどのようにしてそなたはこの世をしのいでいくのか。

天地は広いというが、私のためには狭くなっているのか。日月は明るいというが、私のためには照っては下さらないのか。世の人みんながそうなのか、私だけがそうなのか。幸いにも人と生れたのに、人並にせっせと働いているのに、綿もない布の袖無の海松のように破れ下ったほろだけを肩にうちかけ、つぶれたような傾いだ家の中で、地べたに藁を解いて敷き、父や母は上の方に、妻や子は下の方に、互いに身を寄せ合って、愚痴を言ったりうめき合ったりし、かまどには火の気を吹き立てることもできず、甑には蜘蛛が巣を懸けて、飯をたくことなどとっくに忘れてしまって、とらつぐみが鳴くようにひいひい嘆いている、それなのに、格別に短い物の端をさらに切り詰めるという諺のように、笊をかざす里長の声は、寝床にまでやって来てわめき立てている。こんなにも辛くせつないものなのか。世の中を生きていくということは。

憶良帰京後の第一声。天平四年冬頃の作か。筑前での見聞にもとづいて創り出された貧者と窮者との問答を通して、俗世に生きる人のすべなさを歌ったもの。

◇堅塩　燻製にした保存用の塩か。◇つづしろひ　少しずつ食べる意の「つづしる」の継続態。以下継続態が目立つ。◇しはぶかひ　咳をしつづける意。◇びしびしに　鼻汁を啜る音。◇麻衾　目の粗い麻で作った夜具。◇布肩衣　「布」は麻や紵による織物で、「絹」より粗末な衣料とされた。◇飢ゑ寒ゆ　「寒ゆ」は下二段動詞終止形。凍える。◇わくらばに　他と区別された状態を示す語。とりわけ。◇かかふ　ぼろきれ。◇伏廬　竪穴住居の掘立小屋か。◇曲廬　柱の歪んだ小屋か。◇愛へ　哀願して嘆く意。◇火気　煙や湯気。◇甑　米を蒸す土製の器。◇のどよひ　細々と悲鳴を放つ意。◇里長　農村の直接の管轄者。五十戸を里とし、長一人を置いた。◇呼ばひぬ　税を取り立てては呼び立てるのであろう。

893　この世の中をいやな所、身も細るような所と思う次第ですが、捨ててどこかへ飛び去ることもできません。私ども人間は所詮鳥ではありませんので。貧者と窮者の問答に対して憶良の感想を述べたもの。◇厭しと恥しと　仏教語「厭恥」などの翻案語。◇鳥　俗世解脱のための知恵を、仏教では鳥に譬えている。

一　貧窮問答の歌一首　并せて短歌

892
風交り　雨降る夜の　雨交り　雪降る夜は　すべもなく
寒くしあれば　堅塩を　とりつづしろひ　糟湯酒　うちす
すろひて　しはぶかひ　鼻びしびしに　しかとあらぬ　ひ
げ掻き撫でて　我れをおきて　人はあらじと　誇ろへど
寒くしあれば　麻衾　引き被り　布肩衣　ありのことど
と　着襲へども　寒き夜すらを　我れよりも　貧しき人
の　父母は　飢ゑ寒ゆらむ　妻子どもは　乞ふ乞ふ泣くら
む　この時は　いかにしつつか　汝が世は渡る
天地は　広しといへど　我がためは　狭くやなりぬる　日
月は　明しといへど　我がためは　照りやたまはぬ　人皆
か　我のみやしかる　わくらばに　人とはあるを　人並
に　我れも作るを　綿もなき　布肩衣の　海松のごと　わ
わけさがれる　かかふのみ　肩にうち掛け　伏廬の　曲廬
の内に　直土に　藁解き敷きて　父母は　枕の方に　妻子
どもは　足の方に　囲み居て　憂へさまよひ　かまどに
は　火気吹き立てず　甑には　蜘蛛の巣かきて　飯炊く
ことも忘れて　ぬえ鳥の　のどよひ居るに　いとのきて
短き物を　端切ると　いへるがごとく　しもと取る　里長
が声は　寝屋処まで　来立ち呼ばひぬ　かくばかり　すべ
なきものか　世間の道

893
世間を　厭しと恥しと　思へども　飛び立ちかねつ　鳥に
しあらねば